夏大会史上初の２校ベスト８

Front Report

第98回全国高校野球選手権宮城大会は７月９から28日まで開かれ、登米高と佐沼高が８強入りした。夏の大会で、登米学区から複数校が８強入りしたのは、史上初のこと。

登米は、大河原商業、気仙沼向洋、塩釜を破り、準々決勝で、春の東北大会準優勝の東陵と対戦。健闘したものの１対６で敗れた。

東陵は一回２死から３連打で２点を先取。登米は守備陣が粘りを見せるも、徐々にリードを許す。しかし最終回、阿部（新）が三塁打を放ち、塩口が遊ゴロの間に生還し、一矢を報いた。

菊地圭佑主将は「60年ぶりの４強入りは果たせなかったが、後輩たちに歴史の扉を開いてもらいたい」と前を向いた。

佐沼は、柴田農林、仙台三、涌谷、仙台を破り、準々決勝で優勝候補の仙台育英と対戦。強豪相手に０対21で涙を飲んだ。

仙台育英は一回無死二、三塁から内野ゴロで先制。その後、打者15人で12点を奪う猛攻。佐沼も諦めず、必死に食らいつくが、相手投手陣に散発３安打に押さえ込まれた。

茂泉監督は「初回の攻撃で、相手にある程度圧力をかけることができた。しかし、裏の攻撃はすさまじい集中力ではねかえされた。そのような中で、選手は良く頑張った」と選手たちをねぎらった。

❶阿部（新）が右中間に３塁打を放ち反撃ののろしをあげる❷今大会、初先発の菊地。全てを出し切った❸「守りきる」。一塁手佐々木は全身を伸ばし捕球❹反撃に向け気勢を上げる❺九回表、三番手の黄川田を投入❻勝利を信じ応援団も最後まで諦めなかった❼今大会、主戦として準々決勝以外、全て先発した西條。三回2/3を投球し、仲間の反撃を待った

❶大差を付けられても、最後まで投げ出さず戦った佐高球児❷主戦としてチームを引っ張った塚本❸バッテリーの苦境を、守備陣が支える❹反撃に向けて、自分たちのすべきことを円陣を組み確認❺粘り強いスイングで好球を待つ❻塚本からマウンドを託された加藤❼少ないチャンスを生かそうと積極的な走塁を見せた

皆さん「広聴」って知っていますか。あまり聞きなれない言葉かもしれません
広聴は「広く聴くこと」。市民の意見や要望などを市政に反映することです
「広聴」がうまくいくと、そのまちは「好調」になります

ＰＲは双方向の より良い関係づくり

市は、旧町時代から「広報広聴事業」に取り組んでいます。広報は、広報紙やウェブサイトなどを使い、情報を受発信する業務。こちらは皆さんがイメージしやすいと思います。広聴は読んで字のごとく「広く聴くこと」。市民の意見や要望などを広く聴き入れ、市政に反映する業務です。

自治体行政で、広報・広聴の制度化が始まったのは１９６０年代後半のことです。広報紙の発行や首長への手紙、首長や行政幹部が出向いての地域集会などが、盛んに実施されるようになりました。

今では、広報・広聴が制度的に定着。その手段は、広報紙などの紙媒体や地域に出向く集会だけではなく、ウェブサイトや動画配信など、ＩＴ技術の進展にともなって高度化しています。

広報・広聴は、英語でＰＲ（Public Relations（パブリックリレーションズ））と訳されます。一般的にＰＲは、情報発信のイメージがあります。本来はパブリック（公衆、大衆）、リレーションズ（関係）で「公衆とのより良い関係づくり」を意味する言葉です。

広報・広聴事業は、どちらか一方的はものではなく、行政と住民が双方向で情報や課題を共有し、良いパートナーとなっていくためのもの。

どれだけ、情報発信技術が発展しても、意見を聴く体制が強化されなければ、意味のないものになってしまいます。

本市は、移動市長室など、６つの広聴事業を展開しています。

第二次総合計画で描く本市の将来像「あふれる笑顔　豊かな自然　住みたいまち　とめ」は、市民、地域、行政、三つの「力」をプラスして「人」が「動」く真の協働があってこそ実現できるもの。皆さんと共にまちを総点検し、課題や問題を共有することが第一歩となります。その一歩を踏み出すためには、広聴事業の活用・充実が鍵となります。

全市民約８万２千人の声を市政に反映する「広聴なまち」から、「好調なまち」を目指していきます。